

氏 名(本 籍) <sup>かく</sup> 角 <sup>た</sup> 田 <sup>ゆき</sup> 幸 <sup>ひこ</sup> 彦 (北 海 道)

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 博 乙 第 845 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 5 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当

審 査 研 究 科 哲 学 ・ 思 想 研 究 科

学 位 論 文 題 目 ア リ ス ト テ レ ス に お け る 神 の 理 性

主 査 筑波大学教授 文学博士 廣 川 洋 一

副 査 筑波大学教授 文学博士 工 藤 喜 作

副 査 筑波大学教授 文学博士 藤 田 晋 吾

副 査 筑波大学教授 野 町 啓

副 査 筑波大学教授 文学博士 中 山 恒 夫

## 論 文 の 要 旨

本論文は、アリストテレスの哲学体系の根底をなすとともに彼の思想行程の初期から最後期までを貫く、神と理性の問題を、彼の著作とりわけ『形而上学』『靈魂論』『動物発生論』『ニコマコス倫理学』を視野の中心において考察したものである。アリストテレスにおいてそれまでのギリシアの哲学や学問の全領域が合流した。いな、諸々の領野の学的建設そのものが彼の手によってなされたともいいうる。彼によって経験の世界が生滅を超えた天上界と生滅の下に立つ自然界、そして行為とことばと意識の複合体としての人間界へと広がった。神と理性こそ、これらの全体を統轄する原理としてアリストテレスによって深く問い探られた問題であったと著者はみる。アリストテレスの全体像を把握することは至難の業であるといえようが、著者は、神と理性の視点からこの思想的巨人に迫ろうとする。この視点こそアリストテレス哲学の最深部へと通ずる最も確かな道筋であるからである。

第一章では、『形而上学』IV、VI巻の考察を中心にして、アリストテレス形而上学の性格が論究され、それが実体論に基礎をおく存在論であること、しかもこの実体論が神学へと深化する方向性を強くもつことが明らかにされる。これは著者による清新な視点として評価される。不動で永遠の実体こそ第一の実体であり、すべての存在と実体はこの第一の実体に依存するといわれるが、本章での著者のすぐれた指摘は、第一実体としての神、不動の動者の、他のすべての実体(感覚的消滅的、感覚的永遠の実体)、とりわけわれわれ人間にたいする<sup>か</sup><sup>か</sup><sup>わ</sup><sup>り</sup>の問題であろう。すなわち著者によれば、神としての不動の動者は、場所的運動の始源者という自然学的役割を超えて、地上の生滅実

体の完全性、そしてそのなかの「第一の実体」である人間の完全性への動きにとってその導き手となっている、のである。

第二章では、第一章での原理的方向づけの作業に沿って、アリストテレスの神思想の性格と意義が、『形而上学』ⅩⅦ巻を中心として論じられる。アリストテレスの神学としてひとつのまとまりをもつのは、ただ『形而上学』ⅩⅦ巻だけであるが、著者はこのⅩⅦ巻の意義を、『天体論』『自然学』における天界の始動因としての神、不動の動者から、目的因としての神への転換、あるいはむしろ決定的な深化がなされたことに認める。ⅩⅦ巻においてはじめて『自然学』における運動論的視座の不徹底性が打破され、目的因としての神の存在性がさらに深く究明されるにいたった。しかも著者によれば、この深化は、天文学的運動論に、生成消滅に立脚する生物学的運動論の中心概念である現実態が組み込まれ、結びつけられることによって生じたとされる。ここにも著者の斬新な知見が認められる。神は天界の実体の根底をなすだけでなく、生命そのものとして（神の理性の現実態は生命である）、いっさいの消滅的実体の生命活動の原理を根底から支えるものであることが明らかにされ、かくて、ⅩⅦ巻は『靈魂論』Ⅲ巻5章の能動的理性や、『ニコマコス倫理学』Ⅹ巻の、観照的生を真の人間的幸福とする思想と深く連なることになる。

第三章は、『靈魂論』に集中して、アリストテレスの理性論が考察される。人間の靈魂は他の生物と異なりその先端を理性につないでいる。理性的靈魂こそが人間の生命的原理の固有性をなす。理性は靈魂の一部であると同時に靈魂の生命を超えた超越性をもつ。著者は、人間における生命原理としての靈魂と理性のかかわりをこのように把握した上で、さらにアリストテレス研究史上の難問のひとつとして古来多くの論議をよんできた問題、「理性がいわゆる能動的理性と受動的理性に二分されたのはなぜか」を考察する。この問いに答えることこそ、人間的理性の本質と意味を最もよく究明しうる方途である、と著者は考える。人間的理性は、靈魂の能力のひとつとしての感覚に由来する表象像なしには遂行されえない。しかし人間的理性がそれとして真に存立するためには神的理性すなわち能動的理性が要請されねばならない。能動的理性は、理性のもつ超越性とその神的起源を強調したものといえる、と著者は主張する。

第四章では、アリストテレスの理性論がその生物学研究のなかでいかに位置づけられるかが『動物発生論』の詳細な分析を通して考察される。理性は『動物発生論』において「外から入って来る」といわれている。この点について、著者は、理性は靈魂のたんなる生物学的展開の過程上での出現ではないこと、それは靈魂の外にすでにそれ自身としてあったこと、そしてこの主張がアリストテレスの生物学研究の具体化と徹底化のなかで打ち出されていることを重視すべきであると主張する。理性は脱身体・脱自然であるばかりでなく脱靈魂でもある。人間というひとつの生命的存在者は自然的生命の展開を超えたものとしての理性の介在を不可欠とする。理性が実体として人間のうちに到来したということ、換言すれば人間の人間たる所以（理性的存在）が人間を超えた神によってこそ支えられ導かれているということがアリストテレスの不動の確信であったと著者は主張する。人間理性はたんに人間の理性ではなく神的理性に支えられてはじめて人間の理性となる。「外から来た理性」はかくして『靈魂論』Ⅲ巻5章の能動的理性、『形而上学』ⅩⅦ巻の理性としての神、『ニ

コマコス倫理学』X巻の人間の幸福としての観照と深くつながることになる。

第五章では、アリストテレスの人間論がその神学と理性論によって基礎づけられていることが、『ニコマコス倫理学』X巻での幸福論を中心に論究される。アリストテレスにおいて倫理学は人間的善への問いを主題とする。人間的善とは人間的行為の究極目的であり、その究極目的とは幸福に他ならない。人間にとって幸福は人間のもつ固有の働きの完成であり、それは第一義的には理性的思惟、観照とみられている。理性の純粹観照こそ人間存在の究極目的である。理性という本来人間を超えたものへの依存によってはじめて人間は人間でありうるというアリストテレスの基本的見解は、『ニコマコス倫理学』において明確であるが、この見解が『靈魂論』『動物発生論』における理性論と、さらに『形而上学』Ⅷ巻の神学とも深く通底することが、著者によって明らかにされている。

補章としての第六章では、プラトン、アリストテレス研究に重要な貢献をなし、しかしわが国では紹介されることの比較的乏しかったドイツの、いわゆるテュービンゲン学派のアリストテレス解釈が紹介される。本章はこれによってとりわけ第二章、第五章の理解に資することを意図したものである。

## 審 査 の 要 旨

現代のアリストテレス研究は(わが国においても)、ことば、知識、行為などをめぐって知識論的、倫理学的関心が主流をなしているといえようが、著者は、神論、理性論こそアリストテレスの全哲学的思索の中心におかれるべきものと考え、この視点からアリストテレスを探究しようとする。著者の関心は、アリストテレスの理性論を、たんに一側面からではなく、形而上学・神学、自然学・生物学、人間学・倫理学の面から、換言すれば、アリストテレス哲学の全局面から総合的に考察することにあるといえよう。著者のこの方法は、アリストテレス理性論の考察としてきわめて正当なものであり、それは、わが国ギリシア哲学研究において重視されてはいてもからなずしも十分に試みられることのなかった学的姿勢である。かかる問題設定と学的姿勢はそれ自体として十分評価されてよいものであろう。

本論文の提示する新しい知見は、すでに要旨において言及した点をあわせ、つぎのようにまとめることができよう。まず、アリストテレスの存在論が実体論に定礎し、その実体論が神学へと必然的に深まる方向性をもつこと、すなわち実体論的神学的方向性がアリストテレス存在論を根本的に規定していること、形而上学と自然学の乖離はアリストテレスにはなく、自然学も基本的に存在論、形而上学と不可分のつながりをもち、両者の差異は質料性への傾斜の強弱にすぎないこと、『形而上学』Ⅷ巻においてはじめて始動因としての神から目的因としての神への決定的深化がなされ、その深化が生物学的運動論の中心にある概念現実態の思想によってなされたものであること、理性がなにより能動的理性と受動的理性に二分されたかという古来からの難問に対して、この二分が人間の理性という場面での事態であったことを指摘して答えていること、理性論の考察を動物学書にまで

も広げ、「外からの理性」を生物学的・自然学的視圏を超出した事がらと捉え、この意味を人間理性の神的理性への依存性において解したこと、等々は注目すべき成果であると認められる。また、著者が主題にかかわる内外の、とりわけドイツ、フランスなど大陸圏の諸文献を博搜し、多数を引用紹介したことは、英米圏での研究に強い影響を受けているわが国学界にとっても意義あることといえよう。

しかし、以上の積極的評価に対して、なお二、三の問題点を指摘せざるをえない。第一哲学の対象にかかわる問題は、形而上学の性格を確定する上できわめて重要であるが、この点について著者の取り組みはやや安易であり、問題は不透明のままに残されている。第一哲学にかかわる異なる二つの概念になんらかの意味で架橋しようとする試みは多くなされてはいても十分ではない現状からみて、いっそう慎重な、さらに掘り下げた論述がなされるべきであった。このことは第一哲学と神学の区分の問題にも直接にひびき、問題を残すことにつながる。アリストテレスは人間理性の働きを能動的理性と受動的理性の共働と捉え、理性の現実的活動には神的な能動的理性が始動因として介入していると考えている、と著者は主張するが、それに対する説得力ある証明は十分になされているとはいえない。また、理性は動物学書においてもたんに自然学的・生物学的視点のみから捉えられてはいないと著者が主張する以上、この主張と反対の立場にあるモロー、ゾルムセンらの有力諸説への有効で強力な批判がなければならないが、これに対する批判は不十分である。これらの点について、著者による研究の進展が待たれる。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば、アリストテレスについての著者の多年にわたる手堅い研究の成果として、関係学界に寄与するところ大であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。